

ドラム缶がグリルに

津波で一時孤立した岩手県船越半島。電気も水道も使えない中、避難所と地域ごとに工夫を凝らしながら自給足の暮らしを送っている。18日昼過ぎ。約70人が避難している山田町の大浦小学校教室に、香ばしい焼き気が漂っていた。男性らが、ドラム缶に薪をくべた「グリル」でサケを焼く。地区にあった水産加工場の冷凍庫が壊れたため学校に寄付された。元でとれたサケやホタテ。ご飯がおいしい」と子供たちにも人気だ。お母さんたちは食事当番を班の交代制で回す。校長の種澄美さん(52)は「避難者の方々はストレスもたまっ

避難所手作り

岩手県山田町 2011. 3. 21

岩手・山田町70人のチームワーク

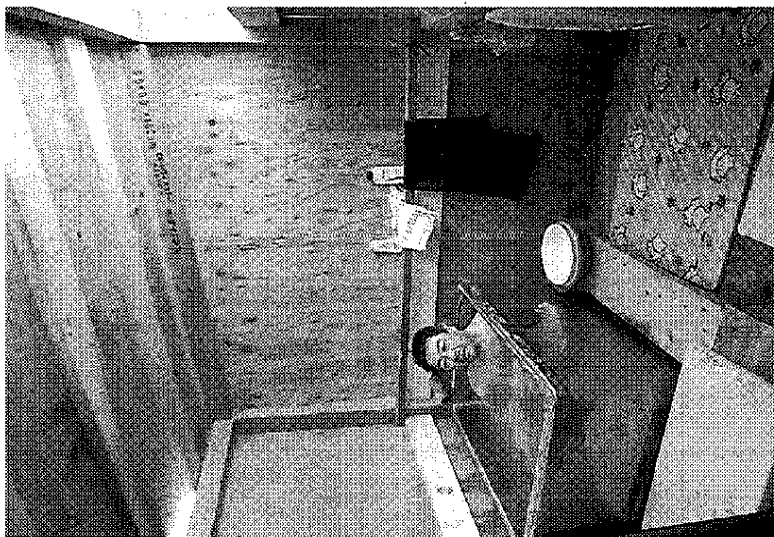
てきたが、地域の人が主体的にアイデアを出してくれるので助かっています」と話す。トイレは、大工の関口良さん(53)の手作りだ。隣の畑を借り、パワショベルで穴を掘り、その上に木を載せて踏み板にした。小屋は、ホタテ



の養殖いかだ用の材木を使って造った。サツシの小窓もついている。夜に懐中電灯を持って入ると、外からは明かりで「使用中」だとわかる。校庭の奥には、即席の洗濯場がある。学校の脇を流れる小川からホースを通し、水産加工用の大きなタンクに水をためている。洗濯していた女性は「水は冷たいけど、洗えるだけでありがたいです」。極めつきは公衆浴場。近くに住む大工の港郁男さん(55)が、自宅の庭に2日かかりで造った。小屋の中は脱衣所と浴場にわかれている。隣のドラム缶に薪をくべてお湯を沸かし、バケツで浴槽に流し込む。港さんは子供たちを何

とか風呂に入れてやりたいと思つて」と話す。大浦小学校のある大浦地区は、湾に突き出た船越半島の中央部にある。津波で半島の付け根に当たるくびれた土堆が水に覆われ、教日間一孤立状態となった。同小には一時100人近くが避難し、家族が行方不明の人もある。それでも、学校の教室や調理場からは、笑い声が聞こえる。家族が行方不明の山崎満子さん(39)は「一人で家にいると悲しくなるけど、避難所にいると『なんでこんなに』と思つくらい笑いがある。照いやりと手しうしうで、何とかがんばりたいです」。(五十嵐大介)

2日で造った仮設風呂



新でお湯沸かし浴槽へ

